

昌輝よどこにいる



母 前 上 な み 忍

前上昌輝探し資料

京都市左京区北白川小倉町

前上 なみゑ

一、自宅出発から行方不明まで

(イ) 京都を離れる

昭和52年4月13日出発

生年月日 昭和32年7月16日生

出発当時の自宅 京都市左京区北白川小倉町

略歴 北白川小↓近衛中↓鴨沂高↓関西文理予備校

特技絵画、書道に抜きん出ている。写真にも趣味を持つ。学校の成績は普通。高卒後、大学受験2年間失敗。人生修行のため自分の好きな北海道に向かう。

出発時に現金二〇万円、その他一五〇万出金可能なキャッシュカードを持たせた。

◎ 自宅出発当時の家族構成

父 前上 重太郎 昭和2年1月6日生、平成4年4月死亡

母 前上 なみゑ 昭和6年1月6日生

姉 前上 典子 昭和30年9月10日生

祖母 前上 キミエ 明治30年10月生、昭和60年死亡

昌輝の出生後から出発時までの父母の職業は飲食店経営（現在はなみゑの弟が継ぐ）。昌輝はその当時、父母の商売を継ぐことは自分には向かないと言っていた（高校時代にはアルバイトとして店の手伝いを行ったこともある）。

(ロ) 東京の友人宅へ

とりあえずは、東京にいる無二の親友中村友紀君（東京の大学に在籍）を訪ねた。その結果、中村君の下宿に滞在し、アルバイトを探し、横浜の製缶工場を見つけて勤務、お金を蓄えることにした。昌輝は、自分の力で北海道へ行きたいと思っていたようだ。

(ハ) 横浜市の製缶工場でのアルバイト

2カ月間在職。その頃、昌輝は母に「お金がたまつたので、いよいよ北海道に行く」との電話をしてきた。電話を受けた母は姉の典子と貞夫（後の婿）と3人で昌輝を訪問。横浜駅で待ち合わせ、一日行動を共にし、生活用品などを買った。その日の夜、8時頃、横浜駅で別れた。その時に、何をしていてもとにかく一週間に一回は必ず自宅に現況報告するよう堅く約束した。その後ずっとこの約束は守られていた。

(ニ) 北海道の牧場で（6月25日～9月20日）

母たちと会った数日後に、昌輝は北海道に行き、最初に札幌にある北海道庁を訪れ、「牧場で働きたい」ということで、富良野の牧場を紹介された。

◎北海道での就職先

FURANUI FARM 北海道上富良野町草分 牧場主篠原弘方

前略 みなさま お元気ですか。

長い連絡をせすに申し分けありませんでした。
俺は元気で働いていますから安心して下さい。

今、俺が働いている所は、旭川の上富良野
にある篠原牧場という所です。

ここにきてから10日ほどたち、体もようどくなれてき
ました。始めのころは体がバラバラになるかと思っ
たほどでしたが、今はなんとか体がついてく
るようになりました。朝ら時から夜8時ごろまで
働かなければなりません。メシも景色もいいので
けっこう楽しんでおられます。また仕事がよくわか
らずトシばかりふんでおられますが、なんとかかんとか
やっておりますので安心して下さい。

こちらの家族の人たちもみんないい人たちで、こ
ころなじんできっとります。

そちらの方には、何も変化はないでしょうか？
もう7月でそちらは蒸い暑いでしょうか。■こちらは
いたってかいてきで、いくら汗をかいても、気持ち
いいくらいです。もうじきギオン祭で店の方も
いそがしいでしょうね。ここ北海道の空から
店の繁盛を祈っております。では後はメンドウクサ
イのもうやめて、又、電話なり手紙なりの連絡
をお待ちもしております。家方々みなさま
には、暑い中へくれもお体に気を付けて
下さいませ。では乱筆乱文たいて人失礼
いたしました。 敬具

7月4日 北海道旭川上富良野草分

篠原牧場

前上昌光軍

昌輝はまず最初の様子報告には手紙を用い、自宅宛に送っている。以下はその原文。

その後には姉にも手紙を送り、北海道へ友人が訪ねてくれた近況を伝えている。手紙はこれのみで、あとはすべて電話で家族と連絡を取り合っていた。

この間の8月1〜3日、東京の友人2人（中村君、倉知君）が牧場を訪問。昌輝は3日間仕事の休暇をもらい、共に北海道を見物する（層雲峡、大雪山、礼文島）。

また、家族（父、母、姉）は8月10日に牧場を訪問し、昌輝と会っている。（その時の目的は、篠原氏へのあいさつである。）

8月下旬昌輝は断念していた大学を再び受験することを決意し、自宅との連絡の中でそのことを母に伝えてきた。母は「それなら、受験の準備を早くしないといけないので、こっちに帰ってきなさい」と言った。昌輝はそのことに同意し、牧場主である篠原氏に相談し、篠原氏の希望を入れ、9月20日まで働くことにした。

9月19日自宅に電話し、翌日からのおおまかな行動予定を姉典子に伝えている。（見ておきたい所を廻り、その後青森の友人、東京の中村君を訪問する予定だった。）

9月20日、篠原牧場を退職。篠原氏が車で富良野駅まで見送っている。

（ホ）旭川駅で行方不明に

9月20日〜21日国鉄旭川駅前の第一ホテルに二泊。夕食は外食している（宿泊名簿に二泊のサインが残っていた）。

9月22日10時前後、旭川駅の荷物一時預かりにザックを預け、「3日間お願いします」と言ってそこを出ている。出発時の様子は、ジーンズの上下、黒サングラス、首にカメラを下げ、紙袋を一つ持って出掛けたと駅員から聞いた（京都への電話の内容からすると、約3万円を所持していると思う）。

10月18日、左京区北白川の自宅に旭川駅より「荷物を預けたまま取りに来ないので、中身を調査した」

という連絡が入った。

二、昌輝探索（その一）

（イ）行方不明の連絡を受けた直後の家族の行動

10月22日頃、母親と姉が北海道へ直行する。旭川署へ届け出て、事実関係を伝え、行方不明者として問い合わせてもらう。旭川署で旧知の新聞記者（北海道新聞）と再会。昌輝の探索に協力を依頼して、新聞広告を大きく出してもらった。

旭川駅で出された荷物を調べると、運転免許証、現金11万円、キャッシュカード、服の着替え、雑貨類、「派米農業研修生のしおり」、本などが入っていた（荷物は、そのまま本人が取りに来るかも知れないので再度保管を依頼したが、結局は本人が現れないので半年後京都へ送り返された）。

約一週間、北海道に母と姉とが滞在して、四社の新聞記事、テレビ放送など種々の方法を講じて本人を探す。多くの情報があったが手掛かりなし。月末に京都に帰る。行方不明後3年間は人から言われたことはすべてやったが（時にはだまされたこともあった）、それでも手掛かりは何も出てこなかった。

（ロ）京都の警察へも出かけて、行方不明者の資料等を数度確かめに行ったが、本人ではなかった。

（ハ）不審な電話

行方不明の年の11月初旬、京都の自宅に男性の声で電話が入った。声の主は低い声で「前上昌輝の家の者か」とだけ尋ねた。電話に出たなみえは「昌輝のことを知ってるお方ですか！」と叫んだ。それを3回、4

回と繰り返した。この間相手は何も言わないのでなみえが何か言おうとした時、「また電話する」と言って切れた。

(当時は、ただひたすら電話を待っていたが、そのまま今日に至っている。)

(二) 新聞記事の資料

一九七七年11月23日、読売新聞京都市内版「北海道旅行中に行方不明(すでに一ヶ月、予備校生)」として掲載される。

【記事の内容】

京都市内の予備校生が道内旅行中、国鉄旭川駅の荷物一時預かりに現金などを入れたザックを預けたまま、一ヶ月も消息を絶ち、旭川署は家族の届け22日から公開捜査を始めた。この人は京都市内左京区北白川小倉町

関西文理学院前

上昌輝さん(20)。届け出によると、前上さんは大学受験に二度失敗し、予備校に通っていたが、ことし4月13日「アルバイトをして来る。半年ほど戻らない」と家族に言い残し、横浜の製缶工場で働いたあと来道、6月25日から9月20日まで空知郡上富良野町の牧場でアルバイトをしていた。牧場主には「礼文島を旅行して帰る」と言っただけ、国鉄旭川駅に出て同月22日、一時預かりに現金8万円と運転免許証などを入れたザックを預けていたが、3週間も取りに来ないため、同駅で荷物を調べ、家族に連絡した結果、行方不明になっていることがわかった。

旭川署では、礼文島など関係先を調べたが行方がわからず事故、放浪の両面から捜査している。前上さんは身長一七三センチ、長髪で紺色ジーパン姿だった。(原文のまま)

三、昌輝探索（その2）

9年後の再探索

一九八六年、あきらめきれず再びなみえは探索を再開。10月3日、京都を出て北海道に行き、約一ヶ月かけていろいろ手をつくした。

一九八六年、10月8日、HTBの朝の番組「気分は天気」で1分間流してもらおう。視聴者からの連絡を受けて、捜してみるがすべて違っていった。

その後、牧場を訪ねたり、知人からのよく似た人が写っていたとの情報を手掛かりに、その確認のため、NHK北見放送局等のビデオを見せてもらったこともある。

10月5日、北海道の新聞記者の山下竜太さんの好意で、旧知の北海道在住の松下貞美さんを訪ね協力を得て、各地を探し歩く。

10月23日、北海道新聞朝刊の「尋ね人」で掲載。

10月24日、北海道新聞夕刊「まど」で「9年間の空白」という記事が出る。

また、朝日新聞記者が組織だったものとの関連があるのでは、といってそうした組織のアジトに連れて行ってくれたこともあったが、手掛かりなし。

四、昌輝の生い立ち

両親が飲食店を経営しており忙しかったため、姉の典子とともに昌輝は小さい時から、祖母がずっと身の回りの世話をやいていた。姉弟仲が良く、昌輝はおっとりとしたおとなしい性格。絵を描くことが好きで、小

学校低学年の頃には近くの伊庭先生に絵を習っていた。

料理屋を営む両親の下で金銭面での苦勞はなかったが、姉の典子や昌輝が生まれると母親はそれぞれに通帳をつくり、祝い金やこづかいなどみんな貯金させた。月々のこづかいを決めて子どもたちに管理させていた。

昌輝は優しい性格の子供であった。

昌輝が小学2年生の時に、通帳とこづかいを入れていた金庫が、友だちが帰ったあとでなくなっていたことがあった。昌輝はその友だちの所まで「返してほしい」と言いに行き、家の塀に置いておけば自分が「ここにあった」と母親に言うから、と言った。金庫はもどり、その後もその友人は遊びに来ていた。

青年期に大きく育ち筋肉質の体格になる。高校の体育の授業中に左目の眼球底骨折の大けがをした。そのため片目が小さくなり、顔の容姿が変わった。かなり心の傷になっていたと思う。友人の中村友紀君、倉知格君とは特別に仲がよく、親が留守がちで祖母だけの自宅であったがよく遊びにきていた。昌輝は学校ではひょうきん者で通り、おどけて見せたりしてクラスの皆を笑わせていたそうだが、家ではそうした面をあまり見せていない。

なみゑは昌輝に自分の仕事を見せるため、アルバイトとして店を手伝わせた。店では、昌輝がなみゑの後ろから「お母さん」と言って抱きつくと、店の来客者から「いい男に抱きつかれてご機嫌だね」と冷やかされたこともある。

しかしまた、昌輝は父母の商売を継ぐのは自分に向かないとも言っていた。

高校卒業後、一度目の大学受験では美大3校を受験したが失敗。予備校に通い、二度目は美大以外も含めて6校を受験したが、これも失敗した。この時、父親は「もっと努力せよ、それができないのなら自立してみろ」と厳しく叱ったらしい。

なみゑは昌輝には商売は向かないと思っていた。常々「あんたの好きなことをやりなさい」と言っていた

が、京都を出る頃の昌輝との話し合いでは、「あんたは気楽すぎるので、もっと世の中に出て社会の厳しさを知る必要がある」と言い聞かせていた。昌輝は友人とも進路についての話をして考えた結果、「家を離れて、自分の好きな北海道へ行ってみようか」と考えるようになり、京都の自宅を出発した。

五、父親重太郎の死

父重太郎は、昭和六十年頃から肝硬変のため闘病生活をしていたが、平成三年九月に食道ガンと診断され、京大附属病院に入院した。常々「昌輝に会うまでは死ねんなあ」ともらしていた。平成四年に入ると病状が悪化して昌輝に知らせたいと思ったが、どうする術もないまま、父親は最後まで昌輝のことを心配しながら、平成四年四月にこの世を去った。

京都新聞に重太郎の死亡通知を出したが、昌輝は帰ってこなかった。

六、母なみゑの現在の心境

昌輝が行方不明になった時、そのときはそのときで精一杯捜すと同時に、仕事に忙しくて昌輝のことをわかっていないつもりで、本当のことは何も理解してやらなかったのではないかと悔やんだりもしたが、結局、不明のまま終わってしまった。しかし、昌輝が自殺してしまう、あるいは行方を自分で隠し続けるほど強い子だとはどうも考えられず、拉致、誘拐ではなからうかと常々、四方八方に目を向け、耳をかたむけていた。二度目の探索以来、何の手がかりもなく十数年を経ました。

いま、北朝鮮拉致事件報道に接し、加えて、統一教会等のことも昌輝の行方不明時と期を同じくしている



ので、あるいは昌輝も同じ目に遭っているのではないかと、居ても立ってもいられず、再々の探索を今一度
しなくては、死ぬに死に切れぬ思いで一杯です。

どうか、みなさん、探す方法を教えて下さい。御協力、御支援の程、よろしくお願い申し上げます。

追記

行方が知れなくなつて、早、二十五年になります。何ら手掛かりも得られないままに帰りを待ち続けてきました。この冊子を作成してからも五年を経過しました。しかし、この間、特に横田めぐみさんのことが明らかになつて以来、昌輝が北朝鮮に拉致されたのではという疑念が確信へと変わり、「救う会」（現「北朝鮮に拉致された日本人を救出する全国協議会」）にもお願いし、平成十一年には週刊新潮にも記事にしていただき、平成十三年には、警察庁警備局長宛に「拉致の疑いのある失踪事件についての再調査のお願い」の一人として調査をお願いしてきました。また下鴨警察署員の方の訪問も何度かしていただきました。

しかし、本年九月十七日、小泉首相が訪朝し拉致の事実が明らかになつて以来、昌輝も拉致の可能性のある一人として、連日、新聞・週刊誌・テレビなどの取材を受け、これが最後の頼みになるとの思いで応対し、以後のマスコミの報道などを薰にもすがる思いで見ている次第です。

ただ、取材を受ける一方で、ややもすれば薄れがちになる記憶をたどりながら、もう一度、家族や昌輝の友人の協力も得ながら、もう一度思い返して見ました。

昭和五十二（一九七七）年八月、家族に続き友人三人が北海道の彼のもとを訪ねた時に、牧場に三日間の休暇をもらい、礼文島へ小旅行にでかけました。友人と互いのうち解け合う楽しい旅行だったようですが、ただ、友人は既に大学生であるにもかかわらず自分は未だに進路のはっきりしない身であることを自覚させられたようで、再度受験の意志を固めたようでした。旅行後に、そのことは家族への電話でも話していました。しかし、すぐにと言うわけにも行かず、牧場には九月二十日まで働き、その後帰郷する予定だったわけですが、また、別の友人には、この礼文島への旅行の素晴らしさとともに、牧場での仕事が大変きついものではあるけれど、二度受験に失敗して確信のもてない自分にとり実に有意義なものであり、仕事を終えたら京都に

帰ると、手紙を書き送っています。

それが九月二十二日、ホテルの宿泊記録（九月二十日・二十一日）と旭川駅への荷物の預かりの記録を最後に残したまま行方がわからなくなってしまうたのです。この冊子に書いた「礼文島へ行って来る」と篠原さん（牧場主）に言っ出て出かけたという記憶は間違っていたかもしれないかもしれませんが。

しかし、いくら、帰って来ないあるいは帰って来られない理由を探しても見出せません。何か大きな力によって自分の居所を知らずことの出来ない事情があるに違いないと思っています。

「救う会」の人びととの交流の中で、何気なく不審電話「前上昌輝の家の者か。（…こちらから昌輝を知っているお方ですかと何度か呼び掛けるも無言のまま、最後に…）またかける」のことももらした時に、みな同じ電話を受け取っているということを知ることがされた時に、「拉致」であることの確信は絶対的なものとなりました。

私の年齢のことを考えると、もう本当にこれが最後のチャンスだと思っています。どうか、みなさん、今一度、ご支援、ご協力の程、心からお願ひ申し上げます。

二〇〇二年十月

前上 なみゑ